

2016年度 天文資料

平成28年度 第10号 (1月号)

平成28年12月25日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



<年の初めはしぶんぎ座流星群が極大、そしてますますよく見える宵の明星金星>

毎年活発な活動を見せてくれる流星群は、8月中旬の「ペルセウス座流星群」、12月中旬の「ふたご座流星群」、そして1月初旬の「しぶんぎ座流星群」です。今年の極大は、**1月3日の23時頃**、お正月の真ただ中なので、うっかりすると見過ごしてしまいます。

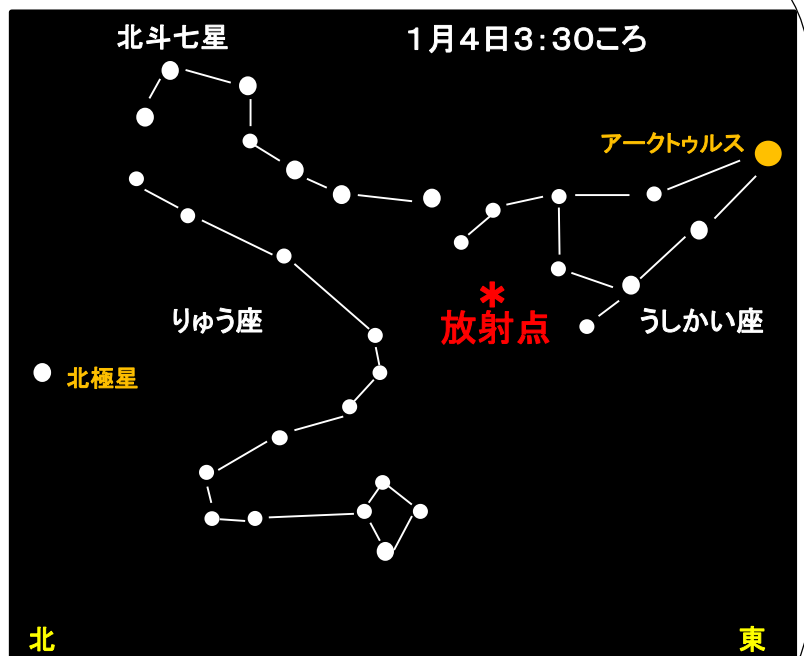
また、宵の明星金星は、夕方西の空でますます見えやすくなっています。1月12日は、太陽から最も東に離れる「**東方最大離角**」、3月の初めまでは、その姿を楽しむことができます。

今回はこの「しぶんぎ座流星群」と金星についてご紹介いたします。

<しぶんぎ座流星群が極大>

「しぶんぎ」とひらがなで書くと少しわかりづらいのですが、「**四分儀座**」と漢字で書けば、角度を測るのに用いられた昔の観測機器だとすぐにわかるかと思えます。でも、「しぶんぎ座」は現在**は使われてはおらず、88星座には含まれません**。現在の**りゅう座**と**うしかい座**の間の**放射点***1の近くに**しぶんぎ座**があったな**ごり**で「しぶんぎ座流星群」と呼ばれています。母天体**2はいくつかの天体が候補にあがっていますが、まだはっきりとはわかっていません。

- ※1 流星は放射状に出現する。その中心点を放射点と言う。
- ※2 流星群を起こすもとになる天体。彗星や小惑星がそれにあたることが多い。



<夕方西の空で金星がよく見える>

12月以来、夕方西の空で宵の明星として輝く金星の高度が高くなりよく目立つようになっています。もうすっかり「**一番星**」として多くの人たちから親しまれています。今年1月12日には、**太陽から最も東に離れる東方最大離角**となります。光度は**-4.4等級**。この時の金星を望遠鏡で見ると、**金星の半分が欠けているのがわかります**。

その後、金星は地球に近づくので、望遠鏡で見ると**大きさは大きくなり欠け方も大きく欠けるようになります**。**1月の末ごろから3月の初めころかけて最も明るくなります**。光度は**-4.5～-4.6等級**です。

3月の初めには、**大きく欠けた金星**のようすが、**小さな望遠鏡でも観察**できますので、望遠鏡をお持ちの方は是非観察してみてください。

なお、金星は3月の下旬には**太陽と地球の間に入り込む内合**となり、見えなくなります。

